

富士塚

児玉 寛嗣

家の近くに「富士見坂」という名の坂がある。このように「富士見坂」と名のつく場所が東京には何か所もあるそうだ。昔は、坂の上から富士山が拝めたのである。高いビルが林立する現在では視界が遮られて「富士見坂」とは名ばかりとなっている。

江戸っ子にとって、富士山はいつでも眺められる山だったのだろう。身近な存在であり、また信仰の対象であつたし、富士登山も盛んだつたようだ。甲州路を歩き、途中、高尾山に詣でて、大月に入り、富士吉田から山頂に登り、帰りは箱根の足柄峠を越えて大山に向かい、伊勢原、藤沢を経て、東海道を品川まで進むというコースをとったという。それも夏の短い期間のなか、全行程をわずか八日間でごなすという強行軍であつた。そこらのハイキングとはわけが違い、年寄りや体の弱い人には出来ないことだつた。そこで出てきたのが町のなかに富士山を作ればいいという発想だつた。それは「富士塚」といわれ、神社や稲荷の境内に高さ五メートルほどのミニチュアの富士山が築かれた。表面は富士山から運ばれてきた溶岩で覆われた。江戸時代以降に作られ、現存するのは四二箇所、そのうち江戸時代のもものが三か所に残っている。

そのひとつ、台東区下谷の小野照崎神社にある富士塚を訪ねた。変わった神社の名の由来は平安時代初期の公卿で小倉百人一首にも歌を残している小野篁（おののたかむら）を主祭神としていて、上野照崎に建てられたことにある。寛永寺建立のために土地を明け渡して現在の地に移った。この富士塚は文政十一年（一八二八年）に作られ、現存するもののなかでも最も保存状態がよいとされており、重要有形民俗文化財に指定されている。富士山の形をしているものの草で覆われており富士山とはちよつと言い難い。傍らの石柱には「富士塚 浅間神社」と刻まれている。柵で囲まれて入れないが富士山の山開きの日には開放されて登れるらしい。山開きの日にはミニ富士登山をしてみたいものだ。